

B コスモポリタニズムの秩序構想：川出良枝『平和の追求』（東京大学出版会、2023年）を読む

世話人：上村剛（関西学院大学）

司会：小畑俊太郎（甲南大学）

報告者：安藤裕介（立教大学）、網谷壮介（獨協大学）

討論者：川出良枝（東京大学）

本セッションは、川出良枝『平和の追求』（東京大学出版会、2023年、以下本書とする）の合評会を行った。ロシアとウクライナ、そしてイスラエルとパレスチナの血なまぐさい現実に直面しつつ、長年にわたる政治思想史の探究に貫かれた本書の視角からは何が考えられるのか、が本セッションの世話人である上村の開催動機だった。

本セッションの流れとして、まず上村が簡単な趣旨説明を行った。

次に安藤会員が書評コメントを述べた。本書の特徴として、これまでのサン＝ピエール、ルソー、カントという教科書的な図式にはおさまりきれない多種多様な思想史の脈を描述したこと、そして各思想家の解釈としても多々新たなものがみられること、英仏の関係とりわけ七年戦争という文脈の重視などを安藤氏は指摘した。そして、本書の構成について概観したのち、二点コメントした。

まず、本書でとりあげられる思想家が基本的にはヨーロッパの平和のみについて検討しており、アジアなど非ヨーロッパにおける平和は担保されていないのではないかというものである。これは連合論や法による平和についても同様であり、ヨーロッパ的な法、政治の言語をもたない人々との接触についてどのように考えるべきか、問題提起がなされた。

次に、公信用の問題である。本書では穏和な商業や貿易の嫉妬の問題が取り上げられるのに対して、公信用の問題には言及が少ない。ブリテンで議論されていたのに対して、公信用論の少なさがフランス政治思想史の特徴といえるか、と安藤会員は疑問を投げかけた。

安藤会員に引き続いて、網谷会員からも書評コメントがあった。カント研究の見地から18世紀の平和の政治思想史を逆照射するかたちで総論的なコメントを行ったのち、網谷会員からも質問が二点あった。

まず、なぜ戦争をしてはならないのか、という質問である。換言すれば、平和はそれ自体として絶対的な価値があるのか、あるいは他の価値のための目的という意味で価値があるのか（そしてそうであるとすればその他の価値とは何か）のどちらであるか、という問題である。

二点目として、コスモポリットにとって人類の敵はいるのかという質問があった。たとえばカントにおいては、不正な敵は度をこした処罰が正当化されると考えられており、その思想的起源はキケロ『義務について』に求められるという。その思想史の系譜を考えた

際、本書で描かれる思想家たちの議論において人類敵はどのように位置づけられるかという質問が投げかけられた。

以上のような書評者二人のコメントののち、川出会員よりリプライがあった。『平和の追求』は自由の追求が通奏低音である、とまず川出会員は自著を再整理した。国内体制における自由を重視する思想家ほど多くの国家の検討を行うことで躓く。それに対して国内体制に関心のない思想家は世界単一国家に流れていくという、トレードオフのような関係に立つというのである。その前提を置いたうえで、各質問に対して返答があった。

安藤会員の第一の質問に対しては、奴隷制の問題が非ヨーロッパにかかわる問題であり、これは国内体制の自由の問題と関係すると答えた。やはりヨーロッパ的な法の言語を持たない相手は議論の枠組みにおさまらばいい、という。第二の質問に対しては、フェヌロンやルソーは公信用に対して否定的であるとのリプライがあった。網谷会員の第一の質問に対してはコメント中のカント解釈に対して異議が申し立てられたのち、平和の価値について18世紀に特にプラスになるという説明があった。あくまでキリスト教的共同体の一体性の確立こそが主要な価値であり、その結果として平和が生じる、という関係に平和概念は位置づけられる。第二の質問に対しては、人類の敵を想定する思想家とそうでない思想家の間にはグラデーションがあると答えた。人類の敵を想定しないほうにとって、人類という単語は宗教対立を克服するための概念設定であり、そこでは具体的な敵はいるものの、人類の敵にはならない。他方で、世界君主政の反発はあり、そのような共通の敵を見据えつつ、自由の追求を模索した思想家も存在すると返答した。

その後、セッションの最後の30分あまり、フロアとの質疑応答の時間があった。ルソーの宗教論についての見解、コスモポリタニズムの定義についての異論、トマス・ペインとの関係で福祉と公信用をどのように評価するか、自然法の問題を背景とした英仏におけるコスモポリタニズム論の性格のちがいについて、スコットランド民兵論争と関連して軍事論の位置づけについて、など多岐にわたる質問が寄せられ、川出会員よりそれぞれ応答があった。土曜午前中のセッションにもかかわらず35名程度の参加がみられ、活発な質疑応答となった。